



TITLE:

國民的産業としての生絲

AUTHOR(S):

勝山, 勝司

CITATION:

勝山, 勝司. 國民的産業としての生絲. 經濟論叢 1929, 29(6): 900-910

ISSUE DATE:

1929-12-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/129824>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

經濟論叢

號六第

卷九十二第

行發日一月二十年四和昭

論叢

地租に於ける累進

運賃負擔力の表現とし容積と重量

平均生産力説について

説苑

貨幣價值決定原理の一考察

所謂公開市場取引に就いて

明治政府の貸附金

講演

國民的産業としての生糸

雜錄

地方税不動産取得税

舊金澤藩士 斗南士族の就産

統計拾穗抄

株價指數に就いて

近著外國經濟雜誌主要論題

附錄

本誌第二十九卷總目錄

(禁轉載)

法學博士

神戸 正雄

經濟學博士

小島昌太郎

文學博士

高田 保馬

經濟學士

柴田 敬

經濟學士

島 本 融

經濟學士

吉川 秀造

法學士

勝山 勝司

經濟學士

安田 元七

經濟學士

堀江 保藏

法學博士

財部 靜治

經濟學士

益田 熊雄

講

演

國民的産業としての生糸

勝 山 勝 司

一

生糸は日本では何人も口癖のやうに輸出の大宗と云ひます、是は誰でも知つて居る、しかし生糸が日本の税關が始まつた明治の初年から今日迄幾十年此かた、今日有るが如く明治の初年に於ても、日本の輸出品の大宗であつて、それが年々變ることなしに始んど毎年日本の輸出總額の三割、四割の負擔をして居つたと云ふ事實は寧ろ知る人が少いのであります。これは實に驚くべき事實であつて、始めから日本は生糸で國を立てゝ居つたといつても過言でないのであります。

昨昭和三年の貿易の數字を見るに、昨年は日本の輸出總額が十九億七千萬圓、其中生糸はどの位出たかと云ふと七億三千三百萬圓、是は輸出總額の約三割七分になつて居ります。それに若し生糸製品即ち絹織物の輸出額一億三千四百萬圓、それに副蠶絲の一千三百萬圓を合算すれば、此三品の合算が八億八千萬圓になるのであつて、是は日本の輸出總額の四割四分に當ります。茲で直ぐ何人も疑問の起ることは、又さうしたらよくはないかと思ふことは、今日でさへも絹織物が一億圓以上も輸出されて居るのであるから、此生糸を製品にして賣りたいもの

だと云ふ考へであります。是は私も同感であつて、總がて此優良なる原料を製品にして海外に出したいと思ひますのですが、是は中々さう容易にいかないと云ふのは、それは私は少くとも四つの理由があると思ひます。(一)總て製品の海外輸出と云ふものは、文明國から文明の程度の低い國へは参りますけれども、低い文明の所から高い文明の所には行かないのが原則である。だから紡績のやうなものは棉を海外から買つて、さうして文明の低い支那や南洋或は印度のやうな所にその製品を流してやると云ふことが出来ませう。併し生糸は綿の如く低級品でなく高級品でありますから、高級製品は遺憾ながら吾々よりも文明の低い人は使はない、餘計使はない譯ですから、是は吾々よりも文明並びに富の程度の高い國に流してやらなければならぬが、それは右の原則に反するが爲めに、中々生糸の製品は輸出と云ふことに向かない。(二)貿易と云ふものは自分の國內の過剰品を出すと云ふのが原則で、それが貿易の基本だと思ひますが、遺憾ながら我が國の生糸と云ふものは、外國と吾々の生活が違つて居るが爲めに、吾々の製品を其儘外國に用すと云ふことは困難な事情にあるのです。是は我が國の輸出商品を見れば直ぐ分かる、吾々が出して居る輸出品の中の大部分は皆原料品である。原料品は萬國共通でありますから、どこへでも向くのであるが、製品と名の付いたもので吾々が海外に賣つて居る物は何がありません、日本の貿易の表を見ても製品と名のつくものは陶磁器、メリヤス、それから綿織物、ガラス、帽子、玩具こんなやうな物を賣つて居るのであります。陶磁器はなか／＼澤山の數量を賣つて居りますが、こんな物も我が國民の生活が餘程歐米に似寄つて來た爲めに出て居る譯であります。明治初年には吾々はメリヤスの輸出など無論なかつたのですが、今日は内地にメリヤスの市場が有るから其餘剩が外國に出るやうになつたのである。吾々はビールと云ふものは外國から持つて來たものでありますが、それが戦争中には海外に賣れました。どうしても吾々の生活が國際的になつて來なければ、吾々の製品と云ふものは海外に賣れないと云ふことは當然でないかと思ひます。遺

憾ながら日本の女が御召などを着て居る間は、西陣の織物が直ぐ様海外に賣れると云ふことがない、亞米利加の觀光客が来て大丸邊りを覗いて見て、綺麗だと思つても之を買つて行つて何にしやうと云ふことになると買つて行く譯にいかない。日本の女が洋服を着て靴を穿いて、さうして幅廣の着物を着ると云ふことになつて來なければ日本の絹製品が盛に海外に出ると云ふことがないと思ひます。吾々が洋服を着る、近頃は羊毛と云ふものが澤山日本に入りますが、吾々が洋服を着るから遂には日本に於て羊毛工業が發達して來ると云ふことになり、その製品がやがて海外に出るといふ事になるのであります。英吉利邊りの歴史を見ましても、十三世紀、十四世紀邊りは國民は何で生活して居たかと云ふと、農業であつた。農業は何でやつて居たかと云ふと、羊が盛んに飼はれて世界第一の羊毛の産地は英吉利であつた、英吉利人は此羊毛を自分の所で織物にせず海外に賣つて生活して居つた、是が何世紀も續いた、恐らく十七世紀邊りまで羊毛を海外に賣つて居つた、少くも十五世紀邊りまでは英吉利に羊毛工業と云ふものが起らなかつた。昔と今とはテンボは違ひますけれども、兎に角英吉利邊りもさう云ふ状態であつて、日本が生糸を亞米利加に輸出して居る様に、其頃は英吉利では羊毛を和蘭の機屋に賣つたのである、さうして之は製品にすればよいと云ふことを知りつゝ中々行はれなかつた、所がスペインの海軍が北海地方を略奪して歩くといふので、和蘭の海岸に建つて居つた羊毛のミルがテームス河の河口の處に移つて來たと云ふことが動機で英吉利の羊毛工業が起つたのである。(三)絹製品の如きものはその國の流行といふものがある、日本のやうな所の製品が出ない。(四)絹製品の如き高級製品には各國が關稅の障壁を設けてをるといふこと。これ等の四の理由の下に吾國の絹物が盛に海外に出るのは、まだ先きのことであると思ひます。併し吾々はどうしても之に向つて努力をしなければならぬのでありますから、軈がては自分達の生糸を使つて製品にして外國に出すと云ふ時代が來來すると思ひます。それは恰度英吉利の羊毛が昔は生で出したが今では羊毛製品と

して世界第一の位置を占めて居るやうに、將來は日本もなりたいたいものだと思ひます。

我が國の輸出の大宗は生糸であるが生糸に次いで重要なものは紡績工業、即ち綿糸、綿織物であつて、生糸と綿糸、綿織物の輸出額は日本の全輸出額の殆ど七割を占めて居るのであります。これを見ますと、吾々の國民生活と云ふものが、如何に吾が纖維工業に負ふ所大であるかと云ふことが直ぐ分かるのであります。然らば何故我が國の纖維工業と云ふものが斯の如き發達をしたかと謂ふに、(一)國民性が適して居る。國民性が之に適して居ると云ふことは、紡績にしましても生糸にしましても男女工の手先が器用である。さうして綺麗好であると云ふこと、それから殊に生糸に於ては先に述べたやうに科學的に知識を利用する點が根本にありますことや。それから短時間に努力をしなくてはならぬことや。それから桑園の事に於ても、養蠶の技術にしても、是は日本の農民が適して居る、所謂集約的の農業であると云ふことや。さう云ふ事が如何にも日本の國民性にピッタリとクツ付いて居る。是が若し集約的の農業でなくて、大規模に出来るものであつたならば、亞米利加邊りは氣候も適して居るから養蠶業なり製糸業なりが今日盛んに行はれて居つただらうと思ひます。又今後も南米の如く氣候も適して居る、土地も廣大であると云ふやうな處にはドン／＼此蠶糸業が發達すべきものであるのですが、それが集約的に小さく細々として、そこに集中して頭を使つてやつて行かなければならない仕事である爲めに、南米のやうな處に容易に養蠶業が起き難いと思ふ。あゝ云ふ土地の廣い處、亞米利加でもそうであるが棉なり珈琲なり麥と云ふやうなものは大仕掛の器械で耕やしてやれば一人當りの收入と云ふものは遙かに多い譯ですから、さう云ふ經濟的の理由から起き得ないと思ひます。またもうちつと製糸工場を機械化することが出来ないかと云ふ人がありますけれども、もうちつと機械的に出来たならば決して日本の蠶糸業が今日の如く發達しなかつたと思ひます。機械工業でなかつたと云ふことが日本の爲めに仕合せである、若し養蠶なり製糸なりが機械的に大規模に出

來ると云ふことになれば、日本の蠶糸業の特色がなくなる、是がさうでないと言ふ所に妙味があるので、吾々の仕事は今日世界に覇を唱へて居る所以だと思ひます。それでは將來製糸業が大規模の機械工業になるかと云ふに、是は中々さうならない、と云ふのは綿や羊毛や人絹の纖維工業は機械的に發達し得る性質を持つて居りますが、製糸業は一つの繭を完全に保存して、蠶が繭を造つたプロセスを再び完全に解いて行くと云ふことが、此生糸を造る工場の仕事でありますから、此繭を完全に解かなければならぬ、繭を潰して了つては完全な所を潰して了ふのでありますから、そこに微妙な所があるので之を大工業に移すことが出来ない事情があるのであります。

或る點までは機械的に出來ますが、出來ない所がある、それが寧ろ日本の爲めには仕合であると思ひます。(二)我が國の氣候が纖維工業に適して居る。是は空氣の溫濕などが生糸を繰るのに具合が宜い、また養蠶の方面からいへば日本全國養蠶の出來ない處はない。(三)我が國には鐵石炭が乏しい爲めに重工業が盛になり難い、その爲めに吾々の努力を纖維工業に傾注したといふ事があると思ひます。(四)紡績の方で云へば支那、南洋、印度の如き廣大なる市場を隣接地に持つて居り、生糸でいへば亞米利加のやうな國を直ぐ隣りに持つて居る。即ち吾々の纖維工業に於ける製品が好適の販路を隣接地に持つて居つたと云ふことが、之を發達助長せしめた譯だと思ひます。

斯の如く生糸と云ふものが、明治の初年から今日に至る迄日本の輸出貿易額が段々増大するに連れて、その輸出額が年々増大し初中終總輸出額の三割から四割迄のものを占めて居ると云ふことは、洵に驚くべき事實であると同時に、私は是から得て來る富が日本に無かつたならば、吾々は今日まで英米などに伍して五、五、三と云ふ様な比率の大きな海軍を持つことが出來なかつたのではないか、又もう一つには日本の田舎と云ふものは、此生糸工業がある爲めに今日の如く支へられて居つて、さうして其中から丈夫な身體の勇敢な兵隊も召集することが

出来る、生糸と云ふものが無かつたならば日本は今日まで外國と戦争などを構へることが出来なかつたのではないかと私は本當にそう思ふのであります。

近世の文明は田舎の人口を都會に吸付けると云ふ魔力を持つて居り、またこの近代の文明から生じた所の大起業と云ふものは更にこの人口都會集中の趨勢を助長するやうに出来て居ると思ひます。しかるに吾々の蠶糸業はこの都會集中の求心力に反對して其人口を成べく山間僻地に停めて置かふと云ふ遠心力を持つて居るので、其證據には地圖を擴げて覽れば直ぐ分かることであります。東京の周圍には製糸工場が一つもありませぬ。横濱の周圍にも一つもありませぬ。京都の周圍にも一つもありませぬ。大阪の界限にも絶對にありません。神戸の界限にもありません。只名古屋の郊外に少しあります。これは名古屋と云ふ都市が近年急激に發展して田舎を併合した結果であります。兎に角製糸工場と云ふものは、近世文明に背反した企業であると云ふことが謂へると思ひます。是が爲めにどの位な人口を田舎に引付けて居るか云ふことを考へますと、私共は此蠶糸業と云ふものが日本の國民生活に有つて居る威力と云ふものが、實に經濟的のことばかりでなくて、外に更に重要な働きをなして居ると云ふことが判ると思ひます。

日本は農業國であると申しますが、日本で産する物の中で一番大きな物産は何かと云へば米であります。是は毎年六千萬石取れる、之を價格に見積れば十七億圓位なものでありませう。其次に何であるかと云ふと繭である、繭は昨年々九千五百万貫位取れるのでありますから此價格は六億五六千萬圓を下らないのであります。農林省の統計に依れば米を作る農家の數は約五百万軒ある、其中で養蠶をやるのは二百五十萬軒位ある、さうして米から上がる一家の収入は毎年平均五百圓位でありますが、繭から得る一家の平均収入は大抵三百圓位になるのであります。米で五百圓、繭で三百圓と云ふことでありますから農家に取りましては養蠶は極めて重要な

る仕事であります。二百五十萬軒の農家が假りに一家五人の人があつて養蠶に従事するとしましたならば、一千萬人以上の人が養蠶に携はると云ふことが判る、それから製糸工場に働く工男工女と云ふものゝ數は五十萬人を下らないと思ひます。紡績は日本の大工業でありますが、男女工合せて二十萬人位でありませう。斯う云ふ具合に千萬人以上も農家の人が養蠶に携はり、又五十萬人の人が製糸に携はつて、是が悉く田舎の山間僻地に居ると云ふことは、國民の道德並びに健康の維持といふ點から考へても意義のあることであり、更に又日本の社會問題といふ方面から考へて重大なる意義を持つた事柄だと考へて居ります。都會への人口集中といふことが現代の社會問題を醸生し惡化する傾向を持つてをるのに對し、斯く多數の人を田舎に牽きつけてをる吾が蠶糸業は實に日本の社會問題に向つて大なるレメディーとして役立つてをると信ずるのであります。私は實際痛切にそう云ふことを考へてをるのであります。

二

明治の初年以來今日迄輸出貿易の大宗たる事實を失はないと云ふことや。さうして紡績業の如く原料を悉く海外から持つて來ると云ふのでなく、吾々の持つて居る土壤から悉くが出來ると云ふ産業であると云ふことや。それから其吾々の製出したものが殆ど世界の市場をコントロールして居る、日本が海外の市場を獨りでコントロールして居るやうな品物は生糸を措いて外にない。而かもそれが國民の生活の中に深く喰ひ込んだ産業であるといふことなどを考へますと、是程深い根底を持つた産業は日本には外に無いのであります。明治三十八年頃からの統計を調べて見ますと、如何に日本の蠶糸業がドン／＼發達して來て居るかといふことが分かるのであります。

明治三十八年から大正十四年迄約二十ヶ年の統計を見ますと、日本、支那、伊太利、佛蘭西此四ヶ國の生糸の産額は、日本のみ獨り増大して他國は皆日本に壓倒されて居るのであります。伊太利は二十年前には四百四十一萬

キロ位の生糸を産出して居つたが、大正十四年の統計は四百四十六萬キロであつて依然殆ど増加しない。佛蘭西の如きは二十年前には六十三萬二千キロを産出して居つたが、今日では其三分の一位の二十六萬キロと云ふものに減少して居る。支那はどうかと申しますと二十年前には六百萬キロを出して居り最近僅かに殖えて七百五十萬五千キロになつて居りますが、我が國の統計を見ますと驚く勿れ明治三十八年には支那の六百萬キロよりもずつと少い四百六十一萬九千キロと云ふものを出して居つたに過ぎないのですが、二十年後の大正十四年には實に二千五百五十萬キロと云ふ五倍半にも當る所の増加を來して居るのであります。

それでは世界全體の生糸の産額はどの位あるか、是は餘り正確なことは分りませぬ、只世界の貿易品として動いて居る生糸の數量は大體一億萬ポンドであります。其中亞米利加で七千五百萬ポンド使つて居る、即ち亞米利加は世界の産額の七割五分を使つて居る。日本は世界の需要の七割以上を供給して居りますから、世界の生糸の市場と云ふものは日本と亞米利加とで決定權を持つてをるのであります。

それでは亞米利加で何故そんなに多量の生糸が使はれるかと申しますと、(一)亞米利加が富裕であると云ふこと。(二)亞米利加の氣候が絹物を着るのに適して居るといふこと。亞米利加の氣候は非常に乾燥して居つて、絹物を着て居りまして夏汗が出ないからペチヨ／＼するやうなことがない、従て清心地がよい。(三)近來亞米利加人の生活様式が變つて來たこと。それは冬でも室内を七十五度位に温めて殆ど夏のやうにして暮して居るのが亞米利加人の近頃の生活様式である、それで其中で輕快なる絹の着物を着てをる。(四)亞米利加の國柄として女が勢力を持つて居ると云ふこと。絹物の大部分は女に使はれます、昨今は御承知の通り長く脛を出すことが流行つてをりますから、日本から亞米利加に行く生糸の殆ど四割は女のストッキングに使はれます。今年も米國は一般の景氣が良い爲めに生糸の賣行が非常によい、これは日本の金解禁などにも非常に好都合である。

斯様にして生糸の市價は亞米利加と日本即ち、需要供給の七割以上を司つて居る兩國に依つて決せられて居る譯でありますが、生糸は從來非常に騰落が激しかつた、その高低の差は百斤で場合に依ては千圓もあつた、普通の年でも五百圓以下になつたことがない、しかるに最近數年來高低の値幅が著しく縮つて來て百斤で二百圓以下となつた、詰り投機性の減退と云ふことが昨今の生糸市場に於ては著しい現象であります。何故市場が斯く安定性を持つて來たかと云ふと其理由は、(一)日本の繭の産額が大分確實性を持つて來たと云ふこと。他の農作物例へば麥や米や棉などは天候の如何に依つて人力の及ばないところに豊凶の差が出來る從て相場の騰落が多い、しかるに生糸は昨今蠶種の改良養蠶の技術が進歩した結果日本の繭の産額と云ふものは非常に確實性を増して來た。毎年大體桑畑の反別、種の掃立を標準にして計算すれば繭の收穫の見當が付いて來たのである。所が支那などとは違蠶が多い。又支那は春の繭だけで秋繭は取れない、日本も秋繭が取れるやうになつてから收繭量が非常に殖えたのであります。支那では秋の蠶を飼ふとふことを知らない、昨今少し飼つて來たので支那は恐ろしい國であると言つて心配して居る様な次第であります。(二)亞米利加では今日生糸は贅澤品でないといふこと。贅澤品でありますれば景氣、不景氣で激しく騰落を生じますが、米國に於ては大戰爭以後生糸が民衆化した、米國に於ける生糸の民衆化と云ふことは戸田海市博士が言はれたのであります。民衆化といふ言葉を私も拝借します。さうして米國では年に七千五百萬ポンドの生糸を消費するので、老若男女貴賤を問はず身體のどこかに絹を着けて居ると云ふ風に民衆化した、丁度吾々の味噌や醬油の値段が日々激しく騰落しては困る様に、民衆化した生糸は從來の如く激しい騰落を許さない様になつたのであります。(三)人絹の發達。何故人絹の發達が生糸の市價を安定させて居るかと思しますと、人造絹糸は、亞米利加に於ては千九百二十二年の秋以來その市價が餘り動かな

い、その人絹の市價の不動といふことが生糸市價にも反映して生糸の市價も安定性を増して來たのであります。亞米利加では人造絹糸の産額の四割乃至五割の生産を掌つて居る所のビスコース社が旨い事を考へた、それは人造絹糸を盛んにする爲めには、どうしても販賣方法を改めて他の纖維工業の持たない所の特質を之に與へなければならぬと云ふことを考へたのである、これは非常に賢明なやり方だと思ひますが、今日纖維工業の原料としては所謂 Be Four 綿と羊毛と天然絹糸と人造絹糸であります、ところが此綿も羊毛も生糸も天産物であるから自然に市價が騰落する、然るに人造絹糸はパルプを原料にして造るのでありますから、さう天然の氣候などに依つて騰落のある譯がない。ビスコース社はそこに着眼して千九百二十二年の秋に斯う云ふ宣傳をした、それは自分の所の製品は斯様々々なものであつて、是は斯う云ふ値段に依つて賣出す、さうしてそれは九月の終りに發表したのであります、十月、十一月、十二月の終りまで買ひに來て呉れ、ば此定價表の値段より高くも安くもしない。そこが機屋の方ではその定價表を基準にしてメリヤスでも何でも拵つて、それは幾らに賣れると云ふ見込が付きまますから、機屋は安心して十二月渡しのものまでは製品の先賣り豫約が出来るのです。このビスコース社の販賣政策が當つて千九百二十二年以後の亞米利加の人造絹糸の消費といふものは年々倍加の勢で増大したのであります。千九百二十一年に於ける亞米利加の人造絹糸消費量は僅かに千八百二十七萬六千ポンドでありましたが、千九百二十二年には二千六百五十萬二千ポンド、殆ど四割五分強の増加率を示して居ります、其後毎年々々非常な速力を以て増加し、結局千九百二十七年の統計を見ると殆ど一億萬ポンドに近い消費をして居るのであります。斯う云ふ具合になつて居りますが、それでは人造絹糸の爲めに生糸は賣れなくなるかと云ふと、さうではない矢張生糸も増加して居りますが、少くとも生糸の市價と云ふものはこの人造絹糸の進むに依つて非常に牽制せられる様になつたのであります。人造絹糸は天然絹糸の模造でありますから、人造絹糸の市價は天然絹糸の市

價に對して牽制力を持つことは當然であります、そして人造絹糸の消費量が益々殖えて來れば殖えて來るに隨つて其牽制力が強くなつて來る道理で、從て人造絹糸の市價が安定してをる爲めに生糸の市價も自から安定して來たと云ふことは實際であります。若し金の解禁になつて圓の爲替が安定すれば私は更に生糸の市價は安定するでないかと思ひます。市價が安定すれば生糸の消費は更に増加すると考へてをります。

そこで人造絹糸の話が出ましたが、今日纖維工業に拂はつて居る亞米利加人でも歐羅巴人でも、人造絹糸と云ふものは他の纖維工業の原料、羊毛とか、綿とか、天然絹糸と云ふものゝ仇敵纖維ではなくて姉妹纖維或は補助纖維と稱すべきであると云つて居りますが、今日迄の發達の具合を見ますと、人造絹糸の發達は非常な發達でありますけれども、それでは天然絹糸の消費が減つて居るかと思ふと、さうではなくて段々殖えて居るのでありますから成程これは一緒に大くなる性質のものでないかと思ふことが只今の通説であります。私はもうちつと之を根本的に考へて、天然絹糸は人造絹糸に壓倒されると云ふことはないと思ひます、但し値段はどうしても人造絹糸に壓迫されて、天然絹糸が昔取つて居つたやうな獨占的高値は得られないと思ひますが、今後吾々の產出する生糸が段々縮まつて了ふと思ふことは絶對的にあり得ないと思ひます。吾々の文明が榮へれば榮ゆるほど美を愛する慾求が増大するのは當り前であります、人間が美を愛すると云ふことは本能性でありますから、どうしたつて Human Making の人造絹糸に God Making の生糸が食はれて了ふと思ふことは、實際私は無いと思ひます。さうして文明が盛んになり、富が増加するに隨つて生糸の販路と云ふものは擴張されるもので決して縮小されるものでないと思ふのであります。隨つて吾々の國民生活の基本工業となつて居る生糸が、一朝にして打倒れて了ふと思ふことは是は天の據理が許さないと思ひます。(終)